

## 校長室だより～和光高校今昔 第35号 H27.1.2

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

### 冬合宿の記憶

高校バレー部にとって新人大会の意味は殊更に大きなものであった。「春高バレー」の愛称ではほぼ全試合全国ネットで放映され、そこで活躍した選手が将来の全日本の中核となる時代があった。したがって和光高校バレー部も及ばずながらもこの大会への出場を夢見て1月の地区予選を目指し校外合宿を行うのが常であった。

昭和57年冬は特別な年であった。東北・上越新幹線が11月に開業、この出来立ての特急に乗り女子バレー部は大宮駅を出発した（当初は大宮が始発駅）。行先は「上毛高原」駅、そこから迎えの車に乗り換えて猿ヶ京温泉に向かう。一面の銀世界は当時の部員（2年生2名・1年生10名）達を喜ばせた。上仲・栗原・先本・井上ら力のある9期生は1年生大会で地区ベスト8（川越商業に準々決勝で敗れる）ほか何度か県大会へ進出したが彼女たちの引退後はセッターでキャプテンの関根も大型アタッカーの西澤も試合経験が乏しく、下級生中心のチームであったため低迷していた。新人戦での県大会出場は、久保田敢司先生転出にともないチームを受け継いだ私にとっても絶対に果たすべき課題であった。

さかのぼる前年はこの時期を茨城県鹿島の地で過ごした。海沿いで思ったよりも温暖な気候で地元チームを相手になかなか好成績を収めた。さらにその前年は、7期生の南部なども応援に来てくれて、今となっては信じられないが細田学園と共に群馬県中之条で練習試合を重ねた。



10期生 関根・西澤

今回は練習試合を組まずひたすら雪の中の体育館でレシーブ、レシーブに明け暮れる。この時の1年生（11期生）は全員が最後まで残り主将の早福春美を中心によくまとまっていた。その早福の思い出…「もう30年以上前の話なのであまり覚えていませんが、とにかく寒かったのと辛かったことは記憶にあります。初日の練習で体育館の鍵を失くし、ペナルティでカエル跳び20周くらい全員が廻されたので合宿中足がガクガクでした。終わって部屋の炬燵に入っているときに唯一の幸せでした。」

多分一番練習をしたチームだったが、公式戦では一勝も挙げられずに翌冬を迎える。翌年のチームはキャプテン早福を中心に小林・鯨井・那花・高山・玉山らに下級生の福川・福島・宮本・樋口が加わりよくまとまっていた。和光高校女子バレー部の中で最も選手層の充実していたチームであった。合宿地は千葉県岩井海岸、この選択は前年の寒さに懲りたからだったかもしれない。やはり体育館付の民宿に泊まる。朝練は砂浜のランニング。青春ドラマの世界だった。そして地元の高校にお願いして練習試合。

「内容次第ではマザー牧場行こうかな…」、実は予定通りの行程であったが、「練習」の代わりに「行楽」の効果は絶大。日頃おとなしいセッターの鯨井がひときわ大きな声で頑張っていた姿が懐かしい。おそらくこのチームのベストゲームだった。



**11期生 卒業アルバムより**

女子バレー部の冬の校外合宿は翌年の外房千倉海岸をもって一段落する。ただしその春にはバスケット部と一緒に河口湖（山梨は武井先生の故郷）、夏には浜名先生のサッカー部と一緒に群馬片品高原合宿などこの先も部活行事は続く。ほかにもラグビー部、山中湖・「きくすい」での合宿はいまだにたくさんの伝説が語り継がれる。80年代、クラブ活動全盛期の思い出である。